

令和7年度

目黒日本大学中学校

入学試験問題

国語

試験時間 50分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全15ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄らんに記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者かんとくしゃに知らせてください。
- 試験終了後、監督者の指示しゅうりょうにしたがって問題冊子と解答用紙を提出してください。
- 問題冊子および解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとしします。

受験番号	氏名

一

次の各問いに答えなさい。

問1 次のぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ① 非常時にそなえてデンチをいくつか買っておこう。
- ② オリンピックは四年に一度のスポーツのサイテンだ。
- ③ 卒業式の日には、祖母に髪の毛をユってもらおう予定です。

問2 次のぼうせん部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 写経をして気持ち_ちを落ち着かせる。
- ② 遠足当日は五月晴れだった。
- ③ 大雪で電車のおくれが危ぶまれる。

問3 ①・②の□にふさわしい言葉を後から選び、ことわざを完成させなさい。

① □ 事休す

ア 一 イ 十 ウ 千 エ 万

② □ の威を借る狐

ア 虎 イ 我 ウ 友 エ 蟻

問4 次の空らんには当てはまる言葉を後から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 凶星をつかれてつい、目が（ ）。
- | | | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|-----|---|-----|
| ア | 走った | イ | つられた | ウ | 流れた | エ | 泳いだ |
|---|-----|---|------|---|-----|---|-----|
- ② 明日からの旅行が楽しみで、心が（ ）。
- | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|------|---|-----|
| ア | ゆれる | イ | おどる | ウ | 落ち着く | エ | さわぐ |
|---|-----|---|-----|---|------|---|-----|

問5 次の文のぼうせん部のうち、動詞の本来の意味で使われていないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 明日は家にいるつもりだ。
イ となりの家に犬が三匹いる。
ウ 弟は公園で遊んでいる。
エ 君がいると心強い。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改変しています。)

次の文章は、『鬼滅の刃』というマンガ作品について分析したものである。なお、文章中に出てくる「炭治郎・嘴平伊之助・禰豆子・珠世・愈史郎・不死川玄弥、鬼舞辻無惨」は、それぞれ作品中の登場人物である。

人獣共通感染症は出会うべきではないものが出会ったことで生まれる。ウイルスは寄生した生物の特徴を取りこんで変異する。致死性の低い「御しやすい」ものもいれば、強毒性の「手ごわい」ものもある。何よりウイルスは厳密な意味での生物ではなく、他の生物の細胞を利用して自己を複製させる構造体に過ぎない。だから生物学的な意味では死なない。これらの特性は『鬼滅の刃』における鬼の属性とすべて一致する。

鬼たちはくり返し「自分たちは死なない」と豪語する。「不死」を自称し、「永遠の命」を誇る。でも、実際には剣で斬り殺されることもあるし、薬物で力を失うこともあるし、日光を浴びると例外なく壊死する。X、鬼たちは論理的にはつじつまの合わないことを主張しているのだから。Y、それも鬼が生物ではなく構造体であると考えれば筋は通る。「寄生した生物は死ぬがウイルスというものは死なない」という命題はまちがっていないからである。

それに反して、鬼と戦う剣士Ⅱ医療者たちはもろい。かれらは次々と傷つき、死んでゆく。かれらには鬼のように手足を切られてもまた生えてくるといような細胞再生能力はない。そもそも鬼を殺すための決定的な方法は存在しないのである。最初は「首を切れば」よかつたのだが、ある段階から先になるとそれも通用しなくなる。切られた首がすぐに再生してきってしまうのである。抗菌薬を常用していると耐性のある菌が生まれるプロセスと変わらない。

というわけで、『鬼滅の刃』の説話構造は「鬼殺隊Ⅱ医療者、鬼Ⅱウイルス」という図式でまとめると話は簡単なのである。「なるほど、コロナ禍の渦中にあるときに、この危機をいち早く『友情・団結・勝利』の物語に落としこんだことが多くの読者の琴線にふれたのか」という説明で多くの読者は納得してくださると思う。

でも、それはかんちがいなのである。というのは、作者の吾峠呼世晴さんが『鬼滅の刃』の原形に当たるマンガを『少年ジャンプ』に投稿したのは2013年の話であり、『ジャンプ』への連載開始は2016年。パンデミックとの同期は完全なぐうぜんだからである。

傑出した作品においては、まるで現実が作品を後追いつているように思えることがある。

(中略)

すぐれたマンガは世界の未来を予見する。だから、まるで世界がマンガを模倣しているように思えるということがそこでは起きる。『鬼滅の刃』はそのような例外的なマンガなのだとは私は思う。予見性を備えたマンガというものが存在する。人間と世界のあり方についての深い洞察に貫かれていた作品であれば、それがマンガであっても、映画であっても、小説であっても、読者や観客に「まるで今ここにいる自分のことをえがいている」ようなさっかくをもたらしすものなのである。では、その「深い洞察」とは何か。

『鬼滅の刃』にはある「構造」がくり返し反復される。それは「ハイブリッド」あるいは「どっちつかず」ということである。最初から最後までこのマンガにはつねにある種の「混淆」のイメージが取り憑いている。

舞台は「大正」という設定である。大正時代がマンガの舞台になるということはあまりない（私が知っている例は『はいからさんが通る』だけである）。どうして作者がこの時代を選んだのか、よくわからない。背景が大正時代でなければならぬような物語上の必然性はないからだ。あるとすれば、それが前近代と近代の入り混じった「汽水域」のような時代だったということである。まだ炭焼きが職業として成立している時代であり、ほとんどの人は着物を着ており、主要産業は農業で、自動車や自動車が珍しい時代である（炭治郎の仲間一人である嘴平伊之助は山育ちで自動車を見たことがないので、それを生きものだと思認する）。そういう風景の中で、剣士たちは筒袖に野袴に羽織に帯刀という戊辰戦争当時の戦闘服を着用している。前近代と近代がこのマンガでは混淆している。作者はたぶん「そういうの」が好きなのだと思う。

⑤ 剣士と鬼の間もそうだ。ここにも「混淆」が際立つ。一方にイノセントな「善玉」がいて、他方に邪悪な「悪玉」がいるというようなデジタルな区分線が実はない。物語の中心にいて、炭治郎と仲間たちが全力を挙げて守ろうとする禰豆子は「半分鬼」である。「騎士」が「無垢のお姫さま」の純潔を守るというのは騎士物語の定型だが、『鬼滅の刃』で剣士たちが全力で守る「お姫さま」はすでに穢れた血を持つ病者なのである。

禰豆子を癒す方法を模索する一方で無敵の鬼たちを体内から腐らせる劇毒を調合する珠世・愈史郎の「医療人ペア」は剣士たちの力強い味方だが、この二人は「元・鬼」である。だから、最後まで鬼的属性をそぎ落とすことができないまま、「改悛した鬼」として鬼狩りに関わる。

炭治郎と同期の剣士である不死川玄弥は「鬼を食って」、鬼の能力を取り込むことで戦闘力を高めるという自滅的な大技を使う。クライマックスでは、最後までイノセンスと純粹性の権化として鬼狩りの主力であった炭治郎自身がかれの倒したラスボス鬼舞辻無惨の呪いによつて鬼化して、鬼の世界と人間の世界の「綱引き」によつてかろうじて人間の世界にもどつてくる。

ご覧の通り、剣士たちの中に最初から最後まで「属性がシンプル」というものは一人もいない。全員が何らかのトラウマ的経験とそれから派生する深い屈託をかかえている。トラウマ的経験というのは「あまりに痛苦であるのでそれについて語ることができない経験」のことである。そして、その経験を核としてかれらの個性はかたちづくられている。おのれの人間性の核をなす部分について語れないという本質的な弱さを剣士たちはかか

えこんでいる。そして、その屈託から剣士たちの個性的な戦闘力は生まれてくる。

同じことは鬼の側にも起きる。かれらも（ラスボスの鬼舞辻を除くと）※諸般の事情によって不本意ながら、あるいは自らの意志で鬼になった「人間」たちである。かれらが鬼になったのは、人間であったときに「もう、いつそ鬼になってもいい」と思うくらいにづらい経験をしたからである。そして、彼らは剣士によって殺されるときに、息を引き取る間際になつてかつて自分を鬼に追いやつたトラウマ的经验を思い出す。そして、それを剣士に向かつて語ることでかれらの症状は劇的に寛解する（そしてこの世から消滅する）。これはそのまま精神分析※のメタファーである。

もう文字数がないので、結論を急ごう。『鬼滅の刃』は病と癒しをめぐる物語である（だからこそぐうぜんにもパンデミックの時期にジャストフィットしてしまつたのである）。剣士と鬼たちは全員がある意味での「病者」である。そして、他の登場人物たちはほとんど全員が「医療者」あるいは「回復の支援者」である。だから、極言すれば物語は「戦場」と「病院」だけで展開するのである。戦いで傷つき、限界までつかれ切つた剣士たちが、おたがいに心を通わせ、認め合い、許し合うのは、病床でベッドを並べている「治療中」の時間においてなのである。

このマンガの卓越した点は「健常」と「疾病」をデジタルな二項対立としてとらえず、その「あわい」こそが人間の生きる場であるという透徹した見識にあつたと私は思う。この世には100%の健常者も100%の病者もない。一人一人が何らかの欠損や過剰をかかえており、それぞれ※の仕方で傷つき、それぞれの「スティグマ」を刻印されている。『鬼滅の刃』の手柄はその事実をありのままに受け入れ、病者たちに寄り添い、時には癒し、時には「成仏」させる炭治郎という豊かな包容力を持つ主人公の造形に成功したことにあるのだと私は思う。

（内田樹『街場の成熟論』）

※御しやすい……相手を自分の思い通りにしやすいこと。

※壊死……体の組織や細胞が部分的に死ぬこと。

※命題……判断の内容を言語で表したもの。

※琴線……物事に感動し共鳴するの心情。

※傑出……他からとびぬけてすぐれていること。

※混淆……異質のものが入りまじること。

※汽水……海水と淡水との混合によって生じた低塩分の海水。

※イノセント……純粋なさま。むじゃきなさま。

※改悛……過去のあやまちをあらため、心をいれかえること。

※権化……ある抽象的特質を具体化したもの。

※屈託……あることにこだわって、心配すること。

※諸般……さまざまなこと。

※寛解……病気の症状が軽くなること、あるいは治ること。

※メタファー……「ようだ」などの比喩であることを示す語を用いず、直接その言葉を用いて例える方法。

※あわい……物と物のあいだ。

※透徹……すじみちがとおっている考えであること。

※スティグマ……社会における多数者の側が、自分たちとは異なるとくちようをもつ個人や集団に押しつける否定的な評価。

問1 空らん X、 Y にあてはまる語の組み合わせとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア X―そして Y―また
 イ X―だから Y―しかし
 ウ X―そして Y―つまり
 エ X―だから Y―そして

問2 ぼうせん部①「これらの特性」に当てはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 出会うべきではないものが出会ったことで生まれる。
 イ 寄生した生物の特徴を取りこんで変異する。
 ウ 致死性の低いものもいれば、強毒性のものもいる。
 エ 厳密な意味での生物ではない。

問3 ぼうせん部②「耐性のある菌が生まれる」とあるが、これと似た構造の事例として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 司法の世界では、現行の法律をすりぬけて罪を犯そうとするものが出てくる。
 イ スポーツの世界では、主流である戦術をうちやぶるための戦術が編み出される。
 ウ ビジネスの世界では、周りの者を蹴落としてでも成り上がろうとする者があらわれる。
 エ 料理の世界では、新しいお客さんを獲得するために新商品を開発する必要がある。

問4 ぼうせん部③「現実が作品を後追いつている」について説明した次の一文の空欄にあてはまる言葉を、 い は三字で、 ろ は四字でそれぞれ本文中から抜き出して答えなさい。

作者の深い洞察に基づく作品が、ときに い (三字) を持ち、 ろ (四字) にも現実がマンガと同じような状況になるといふこと。

問5 ぼうせん部④『『そういうの』が好きなのだ』とあるが、「『そういうの』が指し示す内容として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 前近代と近代の入り混じった、風景に描きやすいもの。
- イ 構造が複雑であり、読者にさっかくをもたらしることができるもの。
- ウ 時代も存在もはっきりとせず、物語上の必然性がないもの。
- エ 属性があいまいであり、デジタルな区分線が存在しないもの。

問6 ぼうせん部⑤「剣士と鬼」に関する説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 剣士も鬼も、どちらもトラウマ的経験とそれから派生する深い屈託を抱えた「病者」としての性質を持つが、鬼が「病者」であり続けたのに対し、剣士は「医療者」としての性質もあわせ持っていた。
- イ 剣士は鬼を倒すことでトラウマ的経験とそれから派生する深い屈託を乗り越えることができたが、鬼は己の欲望に負けてしまうという本質的な弱さを克服できずに「病者」となるしかなかった。
- ウ 剣士は本質的な弱さを抱え込んでおり、トラウマ的経験とそれから派生する深い屈託から自らの意志で「医療者」である剣士に志願したが、鬼は「病者」になりたくないという意志に反して鬼になってしまった。
- エ 剣士はトラウマ的経験とそれから派生する深い屈託から「治療者」としての個性的な力を得たが、鬼は「治療者」としての力を必要とせず、高い戦闘力を得るための時間のみを必要とした。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改変しています。)

夕食のあいだじゆう、恭介はきげんが悪かった。きげんの悪い時、恭介はいつも思う。僕はジャングルに住みたい。
「もうすぐ、卒業式ね」

すきやきのなべにお砂糖をたしながら、お母さんが言った。

「そうしたら、恭介も中学生か」

お父さんが言った。

「まだだよ。まだ二月だから小学生だよ」

「でも、もうすぐじゃないか。入学手続きだってすませたんだろ」

「うん」

恭介はぶつちようづらのまま、しらたきを口いっぱいにほおぼった。

今朝、学校に行ったら、女の子たちがサイン帖をまわしていた。もうすぐおわかれだね、とか、さみしいね、とか、そんなことばかり話していた。ひとりが、恭介のところにもサイン帖を持ってきた。

「俺、書かないよ」

「どうして」

「だって、さみしくねえもん」

女の子はきまり悪そうにそこに立っていた。

「何だよ。書きたくないんだからいいだろ」

「もういいわよ。暮林くんになんかたのまない」

女の子はサイン帖をかかえたまま、小走りで自分の席にもどった。みんなの視線が恭介にあつまる。

「ちえつ、何だよ」

恭介は「X」と席にすわった。机の上に、一時間めの教科書と、ノートと、ふではこをだす。ちえつ、あいつも見ていた。ななめ前の方から、暮林くんのいじわる、という顔をして、恭介を見ていた。一時間めは算数だった。担任の大島は男らしくない、と恭介は思う。たとえば今日だって、

「問五、暮林くん、やってみてくれるかな」
なんて言う。

「問五、暮林やれ」

がふつうだと思う。恭介は立ちあがった。

「わかりませーん」

と言う。算数はきらいじゃないけれど、今朝はなんとなくいやな気分だったし、わかりません、と言えば先生が自分でやってくれることがわかってきた。

「わからないのかあ。問四の応用なんだけどなあ」

先生は頭をかきながら、黒板に問題をといてみた。

「これは基礎だからね。これがわからないと中学に行つて苦労するぞ」

給食は、あげパンと、とん汁と、牛乳とみかんだった。恭介は給食当番で、かつぼう着を着て給食をとりに行く。

③「やった。とん汁だ」

恭介は、今までとん汁の日に給食当番になったことが一度もなかった。教室のうしろに立って、一人一人の器にとん汁をつぐ。みんなステンレスのお盆ぼんを持つて一列にならぶ。あと三人、あと二人、あと一人。恭介はドキドキした。あいつの番だ。

「少しにして」

あいつが言う。恭介は、なるべくぶた肉の多そうなところを、じゃばつと勢いよくつぐ。なみなみとつがれたとん汁をみて、あいつはまゆをしかめた。

「少しにしてって言ったでしょ」

「せんせーつ、野村さんが好き嫌きらいします」

恭介が声をはりあげると、大島先生はまのぬけた声でこたえる。

「それはよくないなあ。野村さん、がんばって食べてごらん」

野村さんは、大きな目で **Y** と、恭介をにらみつけた。

お母さんが、恭介のちゃわんに、くたくたに煮^にえたすきやきのにんじんを入れた。

「好き嫌いしてると背がのびないわよ」

実際、恭介は背が低かった。野村さんは女子の中でまん中より少し小さく、その野村さんとならんで、ほとんどおなじくらいだった。「もういらないよ。ごちそうさまっ」

恭介ははしをおいて、二階にあがった。部屋に入るとベッドの上に大の字に横になる。野村さんの顔がうかんでくる。動物でいうならバンビだ、と恭介は思う。三年生の時にはじめていっしょのクラスになって、四年生は別々で、五年生、六年生とまたいっしょになった。野村さんについて恭介が知っていることといえば、保健委員で、とん汁が嫌いで、女子にしては足がはやい、ことくらいだった。今朝あんなことがあったから、今日は一日、だれも恭介にサイン帖を持ってこなかった。もちろん野村さんもだ。恭介はベッドからおりて、机のひきだしをあけた。青い表紙のサイン帖が入っている。ちえつ、恭介はひきだしをしめて、もう一度ベッドに横になった。

中学にいったら生活がかわるだろうなあ、と恭介は思った。勉強だつてしなくちゃいけないし、先生だつて大島みたいなのにきなやつじゃないにきまつている。野球とか基地ごっこばかりをやっているわけにはいなくなる。クラスみんなもばらばらになつてしまう。あいつなんか私立にいつてしまうから、なおさら会えない。あーあ。ジャングルに住みたい。

ジャングルに住んだら、と恭介は考える。勉強もない、家もない、洋服も着ない。穴をほつてその中で暮らそう。ライオンとゴリラを飼おう。狩りをして、その獲物^{えもの}を食べればいい。皮をはいで毛布にしよう。となりのほら穴にあいつが住んでいて、僕があいつの分も狩りをしてやる。僕とあいつのほかには人間はだれもいなくて、猿^{さる}とか、へびとか、しまうまとか、ペット、つぼく、ない動物だけが住んでるといい。

恭介が大島先生に呼びだされたのは、次の日の放課後だった。職員室はストーブがききすぎていてあつい。大島先生は今まで生徒を呼びだしたことなく一度もなかった。恭介は少しドキドキした。

「わざわざ呼びだしたりして悪かったね」

先生が言った。

「何の用だと思う」

「わかりません」

「そうだよな。ずいぶん前のことだし」

「はあ」

「去年の春に、遠足に行つたら。あのとき買い食いしたのは暮林くんだけじゃないって、わかってたんだ。代表でおこられてもらったんだよ。すまなかつたね」

「はあ」

「話はそれだけだ。もうじき卒業だから、きちんと言っておきたくてね。じゃ、気をつけて帰れよ」

「……はい」

「……はい」
 いったいなんなんだ。へんなやつ。恭介は下駄箱げたばこでくつをはきかえながら、まだ心臓がドキドキしていた。もちろん、遠足のときのことは恭介もよくおぼえていた。

僕と、高橋たかはしと、清水しみずと、それから三組のやつらも何人かいつしよに、アイスクリームを買い食いした。集合の時、僕だけがおこられた。——でも、そんな昔のこともういいよ。教師があやまるなんて、気持ちわるい。ちえつ、大島ともあと一カ月のつきあいだと思うとせいせいする。

大島先生の言葉や態度は、いつも恭介をイライラさせる。すまなかつたね、なんて。もうじき卒業だから、なんて。

「あれ」

下駄箱のおくに、白い表紙のノートが入っている。サイン帖だった。

「だれのだろう」

ぱらぱらとページをめくり、恭介はびくんとして手をとめた。あいつのだ。あいつのサイン帖だ。どのページもみんな、なみちゃんへ、で始まっている。なみちゃんというのは野村さんの名前だった。恭介は、すのこをがたとけて校庭にとびだした。冬の透明とうめいな空気の中を、思いきり走る。かばんがかたかた鳴る。

家にとびこんで、ただいま、と一声どなると、恭介は階段をかけあがり、自分の部屋に入った。かばんの中からサイン帖をだす。野村さんのサイン帖。一ページずつ、たんねんに読む。おなじような言葉ばかりが並んでいた。卒業、思い出、別れ、未来。

「おもしろくもないや」

声にだしてそう言つて、恭介はノートを机の上にぽんとほうつた。

その日はそのあとずっと、サイン帖のことが頭をはなれなかった。夕食のあいだも、おふろのあいだも、テレビをみているあいだも、恭介は頭のどこかでサイン帖のことを考えていた。みんなの前で、僕は書かないよつて言つたんだ。書けるわけがないじゃないか。それなのにこつそり下駄箱に入れるなんて、絶対、書いてなんかやるもんか。恭介はいつもより少し早く、自分の部屋にひきあげた。

ドアをあけると、机の上の白いノートがまっさきに目にとびこんでくる。あーあ。やっぱり僕はジャングルに住みたい。ジャングルには卒業なんてないもんな。そりゃあ、中学にいけばいいこともあるかもしれない。あいつよりかわいい子がいて、大島よりぼんやりした教師がいるかもしれない。でも、それはあいつじゃないし、大島じゃない。僕だって、今の僕ではなくなってしまうかもしれない。恭介は机の前にすわり、青いサインペンで、ノートに大きくこう書いた。

野村さんへ。

⑤ 俺たちに明日はない。 暮林恭介

いつか観た映画の題名は、そっくりそのまま今の恭介の気持ちだった。

次の日、恭介がサイン帖をわたすと、野村さんは、

「ありがとう」

と言ってにっこり笑った。机のひきだしにしまっておいた自分のサイン帖のことが、恭介の頭をかすめた。あいつの下駄箱に入れておいたら、あいつは何て書いてくれるだろう。女の子だから、やっぱり思い出とか、お別れとか、書くんだろうか。恭介は、首のあたりがくすぐったいような気がした。教室の中は、ガラスごしの日ざしがあかるい。

「おはよう。みんないるかあ」

教室に入ってきた大島先生が、いつものようにまのぬけた声で言う。もう三月が始まっていた。

（江國香織『つめたいよるに』「僕はジャングルに住みたい」）

問1 ぼうせん部①「ぶつちようづら」、②「きまり悪そうに」とありますが、本文中の意味として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

① 「ぶつちようづら」

ア ふてくされた顔

イ 困惑した顔

ウ 怒りに満ちた顔

エ 泣きそうな顔

② 「きまり悪そうに」

ア つまらなそうに

イ さみしそうに

ウ 気まずそうに

エ 気分が悪そうに

問2 空らん X、 Y に入ることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア X—どすん

Y—きゅっ

イ X—どすん

Y—ぎよっ

ウ X—すとん

Y—ぎろっ

エ X—すとん

Y—きりっ

問3 ぼうせん部③「やった。とん汁だ」とあるが、恭介が喜んだのはなぜですか。その理由を次の空らんに合わせて考え、十五字以内で答えなさい。

十五字以内
から。

問4 ぼうせん部④「イライラさせる」とありますが、この場面での怒りの理由としてふさわしいものには○、ふさわしくないものには×で答えなさい。

- (1) 本当は僕だけが悪いわけじゃないのに、一人だけ怒られたから。
- (2) 「卒業」が近づいているということを改めて実感させられたから。
- (3) わざわざ過去のことを謝る先生を男らしくないと思うから。
- (4) このあと予定があるのに、職員室に行かなくてはいけなかったから。

問5 ぼうせん部⑤「俺たちに明日はない」とありますが、これはどういったことですか、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 卒業したら、クラスのみんなで過ごす楽しい日常がもう終わってしまうのだということ。
- イ 野村さんの好意はうれしいけれど、卒業してしまうので恋人にはなれないということ。
- ウ 明日からは離れ離れになってしまうのだから、自分のことは忘れてほしいということ。
- エ 来年には野村さんは私立に行ってしまう、別々の道を歩まなければならないということ。

問6 本文の内容の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 恭介はジャングルに住む動物が好きなので、バンビみたいにかわいらしい野村さんともいっしょにジャングルに住みたいと思っていた。
- イ 恭介はサイン帖には無関心をよそおっていたが、卒業間近になって野村さんからメッセージをもらうことを思いえがくようになった。
- ウ 恭介は野村さんに対するありのままの気持ちを、自分の好きな映画の題名になぞらえて、サイン帖に書いて伝えることができた。
- エ 恭介は大島先生と離れられることを喜んでいるが、野村さんやほかのクラスのみんなどは離れ離れになりたくないと思っている。

問7

二重ほうせん部「僕はジャングルに住みたい」とありますが、あなたが恭介の友達としたら「ジャングルに住みたい」と思う恭介に対して、どのようなアドバイスをするべきだと考えますか。本文の内容をふまえて、以下の条件にしたがい、あなたの考えを書きなさい。

【条件1】 この作品における「ジャングル」とはどういった場所を意味するのか、簡単にまとめること。

【条件2】 「ジャングルへ行きたい」という恭介の思いに賛成か反対か、またその理由がわかるように書くこと。

【条件3】 書き方は、実際に恭介にアドバイスをする形式にすること。

以下余白

—